

舞鶴鎮守府 第四特別陸戦隊の足跡

石川県 国分 虎夫

私は大正三（一九一四）年十二月二十五日生まれで、大東亜戦争もまだ始まっていない昭和八（一九三三）年五月一日、志願兵として広島県の呉海兵団の水兵科に入団しました。

入団のころの家業は先祖伝来の農業を営み、両親と愛知県の小学校教員をしていた長男、それに小学生の妹と弟の六人家族でした。そして石川県鳳至郡鶴川村の瑞穂尋常高等小学校の高等科を卒業して海兵団に入団したのですが、海軍に対する予備知識は皆無でしたので、入団して後に受ける教科のすべてが始めてのもので、手旗信号、遠泳、オールや櫓の漕法な訓練は厳しいものでしたが初年兵教育の六カ月は足りないほどに思いました。

六カ月の訓練を終わってから軍艦「妙高」（艦隊旗艦）、軍艦「青葉」（艦隊旗艦）などの配属とな

り、満州ハルピン臨時海軍防備隊、ついで大分海軍航空隊、第十二海軍航空隊（中支）等の所属を経て舞鶴第四特別陸戦隊に配属されました。

昭和十七年七月三日からソロモン群島のガタルカナル島の中央北側のルンガ河右岸の草原に飛行場を作ることとなり、呉三特は八〇ミリ高角砲、二五ミリ及び一三ミリの機銃を据えつけ、設営隊は栈橋、通信関係の発信所、受信所、発電所並びに炊事場、幕舎の建設を行いました。

七月六日には設営隊の主力、門前大佐を隊長として約二千五百七十人が上陸、待避壕や地下弾薬庫、附属設備の建設に昼夜休むことなく二交代での突貫工事を行いました。スコップ、ツルハシ、リアカーでの工事で、隊員の中には服役中の者も含まれていました。そして七月七日ごろから毎日、米軍の大型機が高度で飛来しますので滑走路は椰子の葉で隠蔽して作業を中止するなど困難な工事でした。

八月四日には第一期工事が完成し、幅六十メー

トル、長さ八百メートルの滑走路には小型機の発着が可能となり、八月五日、ガダルカナル守備隊から第八根拠地隊に空軍の派遣を要請したのが軍の主脳部は、敵の本格的反攻は昭和十八年以降と判断していたようでした。あるいは、ミッドウェー海戦で我が軍の航空主力が壊滅したのでしょうか、しかし直にこの飛行場からは我が飛行機は飛ばなかったのです。

米軍のガタルカナル攻撃は、艦船八十二隻、潜水艦六隻、飛行機四百五十機よりなる強大な機動部隊の反攻作戦でした。ラバウルからわずか十五分で飛んで来る距離で、海軍設営隊は全く非武装、二千五百七十人は素手では戦えず、建設中は設営隊様々でしたが敵の上陸後は貴重な倉料を食い荒らす足手まといとなっていました。

かくして昭和十七年九月ガダルカナル奪取の使命を受け、舞鶴第四特別陸戦隊の苦闘が始まったのです。

昭和十七年九月一日、豪州作戦上、ガダルカナ

ル島奪取の使命を受けた。上海事変で陸戦隊長として功五級金鷄勳章を拝受の海軍中佐笹川濤平司令を先頭に、特殊部隊として部下九百七十三人、内独立中隊二百三十人を以て第四特別陸戦隊が編成され、九月五日、連合艦隊に附属となり、同日午前、舞鶴海仁会棧橋に輸送船「吾妻山丸」（七、六二二トン）が横付けとなり、九月六日午後八時には軍需品の積み込みが完了した。

九月七日午後一時、長官代理の訓辞があった後、軍楽隊の演奏と総員見送りを受けて午後三時「吾妻山丸」に乗船、午後五時舞鶴港を出港した。

九月十日、横須賀港に入港、九月十二日、軍艦「大井」「北上」等に分乗して午後五時、横須賀軍港を出港した。九月十七日午前七時三十分、内南洋のトラック島に投錨した。既に湾内には連合艦隊の「大和」「武蔵」をはじめ約二百隻の艦船がおり非常に心強く思ったものである。九月十八日午前、トラック島春島の仮設の兵舎へ入る。以後毎日、新陸戦術の猛訓練に明けくれる。

十月五日午前、軍艦「敷波」等に分乗してトラツク島を出港した。当時、日本軍隊は戦略上、最前線で最先端にあるソロモン諸島ガダルカナル島のエスペランズ岬ミンボに、十月九日午後十時過ぎに暗夜を利用して敵前上陸を行った。ここに三カ月分の食糧を揚陸して前線のタサファアローングまで約八里の道程であったが、その間リレー式に飛来するグラマン戦闘機とロッキードの哨戒機に悩まされ、道の無いジャングル伝いでようやく十月十日夜半、タサファアローングの陣地に着いた。

これより先の十月六日には、駆逐艦「浦波」の外四隻で、第四特別陸戦隊百四十人と陸軍兵三百十人がタサファアローングに上陸していた。また十月八日には潜水母艦「日進」、駆逐艦「秋月」外四隻で、タサファアローングに舞鶴第四特別陸戦隊司令笹川濤平中佐以下百八十一人陸兵五百六十人が上陸、十月九日には軽巡洋艦「龍田」ほか駆逐艦の九隻で前線のタサファアローングに舞鶴第四特別陸戦隊四百人と陸軍兵、第十七軍司令官百武中将、

大本営参謀辻中佐、杉田中佐、越次中佐、平岡中佐以下千二百人が上陸した。十月十一日潜水母艦「日進」、「千歳」の大型艦に重砲や戦車を積んで駆逐艦「吹雪」ほか五隻で舞鶴第四特別陸戦隊二百八十九人、陸軍兵八百二人がタサファアローングに上陸した。

この揚陸作戦終了と同時にサボ島沖にて敵艦隊と夜海戦となり、ミッドウエー海戦以来の大損害を被っている。

舞鶴第四特別陸戦隊全員が待望していた輸送船「吾妻山丸」は、十月十五日早朝、五隻の護衛艦に護られた「笹子丸」「崎戸丸」「佐渡丸」「九州丸」「南海丸」と共にガダルカナル島タサファアローングへの上陸を敢行し、我が第四特別陸戦隊の勇士は上陸に成功した。ただ、糧秣、兵器を揚陸中にB17爆撃機の攻撃に遭い、我が「吾妻山丸」「笹子丸」「九州丸」と共に炎上沈没、「崎戸丸」「佐渡丸」「南海丸」は辛うじてラバウルに引き揚げた。「吾妻山丸」は戦友が上陸して十分を経過したこ

る、突如敵機が来襲し、真二つに裂けるのを陸上から見た。そして上陸に当っては四カ月分の食糧を運んだが、ジャングルに隠す暇もなくB 17爆撃機の来襲を受け半分以上を焼失してしまった。

十一月初め、米軍は総攻撃を開始し、十一月十二日、十三日、第三次ソロモン海戦があった。おりから夜半の暗闇でガダルカナルからこの海戦を見ることが出来た。また、ガ島においては熱帯性マラリア並びにアメーバー赤痢が猖獗を極め、上陸して一カ月ほどでこの病気に感染した。通常のマラリア熱は三日熱、四日熱、十日熱の周期であるが、この熱帯性マラリアは九度以上の熱が一週間も続く。またガ島にはサソリがいて、海南島のサソリよりも毒性が強いと言われた。戦友のなかで、今日は誰と誰が危ない、明日は誰と誰とが危ないと毎日言われ、食糧はもちろん、治療するに薬を施す術もなく、毎日の様に多くの戦友が他界して逝った。

十月十八日より爆撃機は夜間に飛来し、照明弾

を落して爆撃するようになった。十月二十五日より一人ずつの壕を掘る。十一月十二日、第二ソロモン沖海戦がある。十二月下旬ごろから艦砲射撃と空爆が激しくなり、いよいよ戦況不利となり、辻参謀の「撤退やむなし」の打電となった。

陸上部隊の無線機も陸戦隊の無線機もほとんど破壊され、使用不能のなかで、舞鶴第四特別陸戦隊の無線機のみ使用出来たので陸軍参謀辻政信中佐はガ島の現地において撤退やむなしと判断、大本営あて撤退覚悟の無線を打ったという。

舞鶴第四特別陸戦隊は昭和十八年二月一日にガ島から撤退することとなるが、大本営からの返信によると、昭和十七年十二月三十一日の御前会議でガ島よりの転進を決定した。

かくして昭和十八年二月の一日、四日、七日の三回にわたりエスペランス岬のカミンボに全員が集結し、ラバウルから迎えに来た駆逐艦十二隻の内三隻は米軍と戦闘し、九隻がカミボ沖に碇泊、海水に膝まで漬かりながら大発で輸送されてよう

やく乗艦を終わり定限の午後十時出港することが出来た。

かくして二日午前ごろにはショートランド島入港ブインに上陸し、ここで一泊、慰問袋と食糧を受け、さらに二月三日には駆逐艦「漣」等に分乗してショートランド島を出港した。二月五日、ニューブリテン島のラバウル桟橋に上陸、待機していたトラックで総員第八海軍病院に入院転進を完了した。

三月五日、午後五時、病院船「朝日丸」と「氷川丸」に乗船、三月十四日にはサイパン島ガラパン港に入港、午後一時に上陸、バスでサイパン島のアスリート飛行場近くの仮設兵舎で全員療養生活に入った。

約一カ月後の四月十七日、この仮設兵舎第五根病舎を退室、軍艦「響」等に分乗して四月二十一日横須賀軍港に入港した。

ここで横須賀海兵団に入団したが五月十日舞鶴に着き、舞鶴海軍防備隊に隔離された。さらに石

川県の山中温泉と福井県の芦原温泉に分れて療養し、五月三十一日、舞鶴海兵団付となった。

昭和五十六年三月「ガダルカナル舞四特戦友会」を結成、昭和六十年五月、舞鶴海軍基地に招待魂の塔を建立して除幕式と慰霊祭を執行した。

ガダルカナルの攻防は昭和十七年七月一日に始まり、二月七日最後の転進の七カ月の間に上陸した兵員軍属の総数は約三万二千人。内戦死、戦病死は約二万九百人、ガ島からの無事転進者は約一万百人その内、第四特別陸戦隊は二百人ほどと聞いている。

【解 説】

体験記執筆者が記しているごとく、ポートモレスピーーに対する南海支隊主力の作戦がようやく開始されんとしつつあった時、ソロモン群島中のガダルカナル島及びツラギに対して米軍の反攻が開始された。これら両島はラバウルの東南方約五百五十カイリの距離にあった。

元来ツラギはソロモン群島の首府の所在地として交通の要衝であったが、これに対してガダルカナル島は単に原住民の住む南海の一島に過ぎなかった。海軍はこの島に飛行場適地を発見し、七月以来設営隊を送って飛行場の建設に入った。体験記にあるように幾多の困難とスコップ、ツルハシという素朴な機械での建設であったが同飛行場は八月五日概成し、海軍航空部隊の使用も可能となったという。

八月初頭、ガダルカナル島には海軍の警備兵力約二百四十人、設営隊約二千七百五十人、ツラギ及びガブツには航空隊兵力約四百、警備兵力約二百のほか設営隊約百四十人が配置されていた。しかし、大本営陸軍部は敵が上陸するまで、海軍がガダルカナルに飛行場を建設し、また一部兵力をこの方面に派遣していたことについて海軍側より何らの通報も受けず、従って全く知らなかったという。

米軍は上陸を開始しました。八月七日午前五時

三十分、この通報は直ちにラバウルの第八艦隊司令部に電信されガダルカナル及びツラギが空海より猛烈な砲爆撃下にあることを報じた。同時にツラギよりは「敵の多数船団は有力なる航空部隊及護衛艦隊協力の下にガダルカナル島及ツラギに奇襲上陸し現地警備隊及設営隊は苦戦中にして六時ごろにはツラギ守備隊は最後の決意をなせる」旨の報告までもたらされるようになった。

ガダルカナルにおいても敵は正午ごろより上陸を開始した。敵の上陸作戦兵力は戦艦一、空母二、巡洋艦三、駆逐艦十五、輸送船三十、四十と報ぜられており、執筆者の記憶と若干異なるが、いづれにしても熾烈な空海からの攻撃にさらされていた。

〔第八艦隊の攻撃（第一次ソロモン海戦）〕敵上陸の報に接した第八艦隊当時の軽艦隊の全力を似て基地航空部隊の攻撃に策応して上陸中の敵を撃滅するに決し、甲巡五隻、軽巡二隻、駆逐艦一隻計八隻を似て七日午後二時三十分ラバウル出撃、

八月午後ソロモン中央水路を経てガダルカナル島に**邁進**した。

この艦隊は同日夜、哨戒線を突破して敵主力部隊に奇襲的夜戦を開始した。激闘五十三分、洋上には残存する敵影も無く巡洋艦八隻、駆逐艦六隻撃沈と報ぜられた。

艦隊司令長官は天明後の敵の航空攻撃を考慮し、泊地に集結していた敵輸送船団に対する攻撃を行うことなく帰途に就いた。かくして我が反撃作戦の最初の好機は失われたが、これがいわゆる第一次ソロモン海戦の序幕であった。

空母「神鷹」の最後

滋賀県 上田 二郎

私は大正十五（一九二六）年十月十七日上田塾一の二男として滋賀県滋賀郡葛川村字細川で生まれる。当時の家族構成は、祖父母、父母、兄弟姉妹の九人でした。地元の葛川尋常高等小学校を卒業、旧制の京都工学校に一年間学びました。

当時は戦争もたけなわとなり、早く行って苦勞せよとの、父の説得により、昭和十七（一九四二）年九月検査を受け、約百人中四十五人が合格し、私もその中の一人でした。

昭和十八年四月三十日、舞鶴海兵団に入団するため故郷を「祝入団上田二郎君」の旗三本と共に家を出発、愛国婦人会、軍友会、小学校、各部落、村総出で村社、地主神社で出陣式が行われ「撃ちてしまぬの精神でアメ公を倒すまで頑張ってください」との挨拶をして村の峠を越え故郷を後にし